

大將が豫て自殺の覺悟をして居たのは思ひ當る事が幾つもある即ち自殺の覺悟をして居た大將は何時如何なる機會に之れを遂行しやうかといふ問題の爲めに今日まで生きて居つたので言はゞ心なき形骸を現世に留めて居たのである而して 明治天皇の崩御が茲に端なく自殺を決行する機會となつたのであつて十三日靈輻御發引の時刻を以て之を遂行したのは思ふに崩御の悲報に接した刹那に決心したといつても宜しからう大將の人格と性行に至つては今更ら吾輩が陳べるまでもなく質朴真摯、謹恪誠忠、君國の爲めに盡すといふ事の外に又た餘念もない古武士の典型を遺憾なく備へた人であつて特に御親任を辱うした 明治天皇陛下に對し奉つて忠誠を勵んだ事はよ

く人の知る所である大將が 明治天皇の崩御に當つて覺悟の自殺をして果てた心事に至りては誠に立派なもので大に同情すべきに拘はらず世間或は將軍の自殺に對して揣摩臆測を逞うするものがあるが誠に言語同斷と謂はなければならぬ大將は其の死に臨んで數通の遺書を認めてあり又た辭世の和歌もある其何れを見ても立派な覺悟の自殺である事は明らかである。

殊に將軍が山縣公に對する暇乞の光景の如きは徐に將軍の面目を想見するに足るものである即ち將軍は九月十二日の午前に辭世の歌の

うつし世を神去りましし大君の

御跡慕ひて我は行くなり

の一首を懐中にして目白臺の古稀庵に山崎老將軍を訪ひ

『近詠一首 斧正を願ひたし』

とて取り出したるに老公は之れを眺めて口中に吟誦する事少時

『御跡したひて我は行くなり』

とあるを始めは唯御大葬に參列する意味と解したるらしかりしが俄然歿死するにあらずや』と思つたので忽ち色を變じ。

『コレハ君……。』

と思はず高聲を發しられたが、乃木將軍が憔悴せし顔色をさし俯け悄然として黙坐せる姿を見るや再び發する能はず自然と暗涙の滲み

來るを幸じて暇き止めつ其儘別られたと云ふが。

山縣公は其後人に語つて、彼の時辭世の意味が明らかであつたので『コレハ君と思はず大聲を發したが其後を語らないで良かつた』と云はれたさうだ。

此の日乃木將軍は山縣公を訪問して後各元帥は勿論長谷川、大島、奥の諸將軍より軍事參議官等の總てを歴訪したが何處へ行きても何か意味有りげなる永訣の言葉を述べし外は默然として宛然木像の如くであつたので、何れの邸にても

『今日は珍らしく乃木さんが來られたが不思議であつた。』

と語り合て居られたさうな。中にも長谷川大將を訪ひたる時、少時

世間話をしたる後に

「僕は當分君に逢へぬかも知れぬが……。」

言はれたので長谷川大將は

「エ、だつて君、明日は十三日ぢやないか。」

と言ふたので乃木大將は唯

「ア、左様だね」と言ひしのみにて辭して行かれたが後に思ひば此の十三日は實に永き別れとなるのであつた。

三三三 皇儲殿下と將軍(最後の御拜訣)

將軍は明治天皇の深き御思召によりて學習院に長となるや愈々、

帝の知遇に感じ身を以て君國に報ずるの念は片時も心を離るゝことがなかつたされば、皇子御養育主任たる丸尾錦作氏は將軍の死を惜むと共に將軍が、皇儲に對し奉りし一班を語りて曰るゝやう

將軍の死は早くより既に堅く決心せるものゝ如く、皇子各殿下に對し奉りても學習院の講堂に於ては他生徒と一般同様に御扱ひ申して自身直接に御訓誡申し上ぐる如き事はあらざりしも。

別に度々拜謁を乞ふて種々御教導申上げて居られたが分けても先帝御登遐以來は殆んど毎日或は隔日に參趨拜謁を乞ふて様々の事共を申上げて居られた。

然るに九月十一日、皇儲迪宮殿下が陸海軍少尉に御任官遊ばされ

たる當日には午前九時頃常になき謹嚴の面持にて參内あり此日は特
に平日とは違ひ特に迪宮殿下御一方にのみ拜謁を乞ひ近侍を遠ざけ
て何事が縷々言上に及びしが其時言上に及びし言葉の中には殿下が
今後陸海軍一士官として御見學遊ばさるゝ事になりしに就いての種
々の御心懸けと聽ては神の御位をも繼がせ給ふべき御身なれば此上
ともに玉體を厭はせ給ひ武によつて心膽を練らせ文によつて知見を
磨かせ延いては下萬民を憐れみ給ひ兼ねて心身共に剛毅に渡らせ給
ふやうなどの言葉ありて一言一句肺腑より出で頗る沈痛の調を以て
いと懇ろに言上ありて尙最後に更に一層威儀を正して「爺も聊か思
惑御座りますれば」と語尾を異様に顛はせたるが今にして思へば是

ぞ皇儲殿下に對し奉りし最後の御拜訣なりけるなり、されど殿下
は勿論下座に承る予の如きも固より左る事とも覺えざりしに將軍
は次いで更に残る御二方の皇子にも拜謁を乞ひそれとなく御訣を申
上げし後名残り惜げに見返りく退出ありたり三皇子殿下も何是も
とは變りし御心地あらせられしが何時もよりは殊に叮嚀に御言葉を
賜はりし様なるが慙くて將軍の後影寂しく門外に消えたるは當日の
正午過なりき然も十四日の朝に至りて計らずも將軍夫妻が同じ及に
伏して先帝の御跡を慕はれしを聞きたり予は錯愕直ちに個人として
取敢へずも同邸を訪ひ次いで東宮御所にも參内して慙くと三殿下に
も言上したるに各殿下共御愁傷殊の外に在し分けても皇儲殿下には

御双の眼に玉の御涙さへ泛べさせ給ひて。

「爺も死んだか。」

との御言葉を拜し予も恐懼措くところを知らず即座には御慰めの言葉さへ申し上ぐる事も叶はなかつた。

三四 熟慮斷行

(眞個の絶筆——副官を愛する子の如し)

既に遺書も辭世も悉く認め終りし大將は最後に副官として晝夜大將の側に精勤せし歩兵大尉山田義雄氏に宛て文字簡なるも其意は千言萬語の教訓にも値ひすべき

「熟慮斷行」

なる四大文字の絶筆を遺されたが而も此の書が大將薨去より十數日九月二十六日に至りて大將自刃の隣室より發見されたのである。

素より斯る事のあらんとは神ならぬ身の知る由もなき山田副官は大將自刃の前日なる九月の十二日、常の如く早朝より大將邸に赴いた。

すると大將は大尉を書齋に招きて

「コンノート殿下には御歸途旅順に御立寄りあらせ給ふべければ同地の地圖に歐文を記入する必要あるが故に午後四時頃に来るやうに。」

と命ぜられたので副官は四時を期して大將邸に伺ひたるに大將は今朝命じたる地圖の事は陸軍省に委曲話し置きたれば同省に就きて聽取るべし今日は幸ひに郷里より親戚も來り實弟（大館集作氏）も上京したれば蕎麥會を開くべし貴様も附合へと物語られ副官も命の儘に大將の側に在りて夫人靜子、令弟大館氏等に四方山の話をなし先きに注文せし長坂なる更科より蕎麥の來るを待ちしもなかくに持参しないので能く／＼問合せると乃木邸を間違へて黒木邸へ持ち運んだ事が分つたので大將も夫人もドツと笑れたさうな。

斯くて程なく蕎麥は持ち運ばれて來た將軍は一同に向つて「サア皆な腹一杯に喰つて呉れ七時には他所に行く用があるから夫

れ迄は相伴をするサア喰べ〜。」

將軍自から先づ箸を取りて一同と元氣よく食し終りしが副官は將軍に向つて自分ば軍事上の研究に付き閣下の指導を得たしとて小官は旅順戰の實驗に依りて勇氣なるものに先天的と後天的とがある事を知りました、先天的勇氣は今更之を論ずるの要も認めませんが後天的勇氣は必ず之を鼓舞作興するの要があると思ひます此の方法に就て小官は塹壕の中で『思慮斷行』と云ふ事を思ひ付きました、勇氣を作興するのは一に思慮斷行に待たねばなりません、再三思慮して斷行するのが眞の勇氣であらうと思ひます、それで小官は壁にも劍にも帽子にも『思慮斷行』の四文字を記して

銘としてあります。」

と述べたるに將軍は最も熱心に副官の言を聞き取られて暫時考へ居られたが

「俺も貴様の勇氣論には賛成である。」

と答へて尙も戦争の話などを笑ひながら物語られたさうだが、翌る

十三日午後六時半の頃大將の親戚にて野戦砲兵第二旅團の副官砲兵

大尉山本光照氏が大將を訪問せしに、大將より墨を磨れと命じられた。

「ハイと」答へて應て磨り上つた後ち二階八疊の間なる即ち大將自刃の隣室に硯を置き大尉は其儘暇を告げて葬場殿に赴いたが。

其跡にて大將は八疊の間に入り歌一首、詩一絶と山田副官に與へたる四大文字を認め終りたる後隣室に入り八時を以て自刃されたるなり此の間僅かに一時間なりし、大將の近親玉木少佐が二十六日大將の書齋の書類等を整理せしに圖らずも絶筆とも云ふべき山田副官に宛てたる遺書を発見したれば直ちに之を山田副官に手渡したるに副官は今更の如く死する迄小官如き者迄に斯くも深厚なる高教を給はるとは誠に軍人としての面目であると感激し果は聲を放ちて泣き崩れたさうだが左もあるべきことである。

三五

烈婦の面影(野津中將の目鏡)

一代の名古に超へ千年の涙衣を染むるものは乃木將軍夫妻が
 悲壯沈痛の最期である。將軍は先帝に殉し奉り夫人は將軍に殉す、
 英雄と烈婦との自刃如何に潔よきぞ此の貞烈なる將軍の夫人は名を
 静子と云ひ鹿兒島の人にて貴族院議員湯池定基氏の妹である將軍
 に嫁したるは花の盛りの二十歳の頃にて將軍が中佐を以て熊本鎮臺
 の聯隊長たりし時、司令官の野津中將が

『乃木の妻は湯池の妹に限る。』

とて自から進んで媒妁の勞を取られたのである。婦人は婚嫁の後ち
 益々婦徳を修めて賢夫人の名があつた。そして他の高位高官の貴婦
 人とは嗜好を異にして當代婦人のハイカラ式とは全然正反對の人で

あつた。

故に夫人は往々他人よりは吝嗇又は世間不見など、誤解されて不
 評判の譏はあれど夫人は其塵事には無頓着にて唯自分の信ずる所を
 行つて居るので従つて家風も極めて質素にて衣服の如きも參内の儀
 式に用ゆる一襲ねはあれど決して高價なる美服を作ることなく不素
 着は銘仙位に過なかつた、又た下婢の如きも二人と雇ひ置く事は稀
 にて大抵は下女一人書生一人にて夫人自ら臺所の手傳ひを爲さるゝ
 事も屢々である。

扱て又た夫人は珍らしき能書家で嚴格な教育を受けた人である、
 そして夫人が初めて上京したのは未だ花の蕾の十五の春であつた

それ故に静子夫人の乙女時代花の如く夢のやうな少女時代は其の郷里なる鹿兒島在て過されたのである然るに人も知る如く其頃の鹿兒島と云ふ土地は非常に蠻風の盛んなる處で。

少年子弟の教育と云ふものは頗る嚴格を極め總て武士的にやつたものであるその子供の教育と云ふことに就いては一番の有司は勿論すべてのものが熱心であつた。忽にしなかつた、それ故に維新の大業に翼賛してあれ丈けの人物も出で、エラものも生れた、この風習は維新となり、明治の昭代となつても變る處はなかつたのである。

かう云ふやうに少年子弟の教育と云ふことには非常なる注意を拂

つたものであるけれども、一方女子教育と云ふことに就いては全部閑却されてゐた、否な、閑却されたのではなく、子女には教育は無用である、婦人には文字の必要なしと云ふ觀念が父兄の頭にあつたのである、このやうな考へは鹿兒島丈けではなく、維新前までの日本人のすべてを支配するものであつたが鹿兒島はその中でも女性に文字を教へることの不必要を思ふことが他よりも烈しかつたものである。

静子夫人も亦こゝに生れた、六つ七つ頃までと云ふものは書物を手に取りることさへ許されなかつたのである、普通一遍の女性として育てられてをつた、然るに世は次第に變つて、鹿兒島藩さへも昔の

儘では立行かれぬことになつた、時勢の變遷は種々なる改革を餘儀なくした。

何でも静子夫人の七八歳となつた頃であつたらうか、今日では貴城院議員に勅任せられてゐる静子夫人の令兄なる湯池定基氏は深く考へる處あつたらしく、或日その嚴父に向はれて

「時勢はどう變るか分らぬ、女でも學問の必要な時代が來るかも知れない、お七などにも學問さして置いたがよろしくはないか。」

と相談した、嚴父定之氏は左程學問が大切であるとは思つてゐなかつたらしいが兎に角、その末女お七さんにはその日から寺小屋通ひを許すことにした。

美しい、聰明なるお七さんは寺小屋に可愛らしい聲で讀書する身となつた、お七とは説明するまでもなく静子夫人の幼名で、夫人は湯池定之氏の七番目の子供として生れたのでかくは名付たのであるその名前の選み方から見ても如何に女子が軽く取扱はれたかゞ判るお七さんは乃木夫人となるに及んで静子と改められたのである。

かう云ふやうにして寺小屋に讀み書きすることになつた静子夫人は間もなくお友達を抜いて師匠をさへ驚かす娘となつた、利發である賢いよく學問の出來る娘さんと云ふ評判を博するやうになり、周圍の聲望は静子夫人の一身に集中されるやうになつた、さうなればなる丈け聰明なそして勝氣な静子夫人は愈精勵し、努力し勉強し

て益ますくその名なを郷黨きやうたうの間に稱たうへられるやうになつた、乃木將軍のぎしやうぐんの代筆ひつとして流麗りうれいなる文章ぶんしやうと暢達ちやうたつの筆跡ひつせきとを以もつて草さうされた書簡しよかんを有いうするものがあるならば、それは必ずかなら静子しづこ夫人ふじんの手てになるものであらう、夫人ふじんは實じつに幼少えうせうの頃ころからして能書のうしよの譽まねが高たかかつたのである。

されば斯かる賢婦人けんぷじんであるから謹嚴きんげんなる大將たいしやうに對たいする貞節ていせつは頗すこぶる立派りつぱなものにて人人ひとごとの仰慕けいぼする所ところである、そして夫人ふじんは常つねに家政かせいと云いふ事に最もつとも重おもきを置おかれたやうで大將たいしやうを始め、故勝典こかつすん、保典やすすけの二子しに對たいしては勿論もちろん召使しやくひやくとひにん雇人いひたに至いたるまで能よく氣きが付ついて少すこしの隙すきも無い程ほどであつたさうな。

又またた夫人ふじんは曾かつて人ひとに語かたつて云いはるゝには

「女子ぢよしとして婦人會ふじんくわい杯なごへ出るのもよいが婦人ふじんは誰たれしも家政かせいを預あづかつて居ゐたものだから之等これらの交際かうさいの事ことよりも先まづ家政かせいの事ことが大切たいせつで、私わたくしは婦人會ふじんくわいへ出るやうな時間じかんがあるなら其それがけ家うちに居ゐて自家じかの家か政せいを充分じゅうぶんに整理せいりした方ほうが何なにれ程勝ほどましかも知しれぬ。」と乃すなはち夫人ふじんの如ごときは何處どこ迄までも日本婦人にほんふじんの典型てんけいと云いふべき烈婦れつぷである。

三六 烈婦の赤心れつぷのせきしん（一命いちめいを良人りやうにんに捧まぐ）

されば此この模範もはんとすべき賢夫人けんぷじんは曾かつて日露戦争にちろせんそうの當時たうじ大命たいめいを奉まうじて將まさに旅順りよじゆんの天嶮てんげんに向むかつて出征しゆつせいせんとする大將たいしやうに向むかひ一般いぱん出征軍人しゆつせいぐんじん

の如くお守札を懐中されたしと願へ出た然るに將軍の氣質として素より斯るものを好まないいで遂に夫人の乞を容れずして其儘出征してしまつた。

斯くて戦役終りて後ち、三年大將の修理は戎衣の爲めに或る洋服店に送られた、主人は何氣なく鉄を入れて洋袴に及ぶと其縫目の所より現はれたのは數個の觀世燃であつた這は言ふ迄もなく大將の身を思ふ餘り夫人が心を籠めて密かに縫ひ込んだ守札であつた。

其後宇都宮地方に大演習のあつた折り多くの焼芋を露營地に運び來りて軍兵を稿婦人があつた、如何なる人かと名を問ふも唯だ笑ふのみであつたが後に乃木大將夫人と知れて、陣中の美譚となつ

た、亦た其後の事である下野國那須野ヶ原に乃木家の別莊がある。

夫人は時々此の僻陬の寒村に來りて一二ヶ月も滞在し夫人自ら數名の農夫を指揮し下女や下男と共に甲斐々々しく立働られ又自ら魚屋、酒屋等へも往きて買物さるゝ事も度々ある、そして大將の別莊には鬱蒼たる平林あり畑地ありて随分廣漠たるものである。

名に負へる那須野の廣原嵐吹き霞玉走る一寒村の事とて西那須野の停車場より別莊迄は石礫危なき細道なる上別莊とは名ばかりの極めて質素なる茅屋の三棟ほど建られて召使は一人の下男と一人の下女他に二頭の愛馬が秣に肥えて將軍の來遊を待つのみなる頗る寂しい別莊であるが將軍が此の別莊へ來らるゝ時は。

必ず此の停車場よりコツ／＼と宛然田舎老人の如く徒歩に召礫道を拾ふを常とし、別荘に入りては自ら農夫と一緒になりて鋤鍬を手にし、野菜の耕作に餘念なく時には馬に鞭打ちて英氣を養ふなど殊に附近の農夫を愛すること恰かも兄弟の如くに親切を盡さるゝより人々は何れも將軍を敬慕して止まぬのである。

抑も乃木將軍の自殺は崇高なる精神の發露したる自然の結果で實に我が武士道のために萬丈の氣を吐いたものである之れと同時に性情行徑共に悉く大將に同化されて聊かの未練もなく潔よく一命を其良人に捧げた大將夫人は又た眞に日本婦人の龜鑑であつて婦道日に廢顏に傾きつゝある今日多くの輕薄者流に向つて無上の教訓を與へたものである。

されば夫人の死に就て將軍と最も關係深き男爵石黒忠惠氏は世に白して云はるゝやう、大將の自刃に就て公式の發意を後らしたのは大將が廢朝中は斷じて世間を騒がして呉れるなと云ふ事であつたから世間に誤りを傳へらるゝも忍んでまで我慢をして居た夫れ故に予に宛てた遺書の如きも今まで妻にさへ見せぬ位であつたが今は廢朝も終つたので親戚や友人で相談して愈々發表する事にしたが發表する以上乃木が自殺の眞情を詐り無く社會に知らしむるには諸君に依て其遺した長文の遺書を寫眞版にして新聞に掲げて頂く外は無ないのである然し乃木の自殺に對する世間の批判は勝手であるが吾々親友

として彼の自殺には飽くまでも確固たる精神のある事を知らしめて此の精神に依つて多少でも世間を益せしめたいと云ふのが希望である予と乃木の交際は明治五年以來の事で彼が當時吳服橋の際に下宿して居て病氣だと云ふので診察に行つてやつたのが初まりで色々と話しをして見ると乃木の父の十郎と云ふのが兵學と武家故實の先生で私しの父も矢張り同種事をして居たので度々交際をしたと云ふ事が判つて一層親密を増す様になつた進んで女大學的の大將夫人と矢張り女大學一點張りの私の妻とも懇意になつた乃木が謹嚴で剛直で而も極めて情に厚く實に古武士の典型である事は勿論誰でも否む事はあるまいから私から諄々しくは云ふまい夫人も亦賢婦人であつた

事は屢々傳へられて居る事だが一と年恁んな事があつた宮中の菊の御宴に招かれて傍の奥様達が目も眩い位の盛装をして居たのに大將の夫人丈は粗末な日本服で夫れ等の人に立混つて頗ぶる泰然とした態度で居られたのには誰も敬服して居た之から大將夫妻が自殺の顛末を述べるが十三日の晩一時頃御靈柩の御發軔に間も無い頃であつた陛下が私を御手招ぎ遊ばされて『乃木が自殺した』と云ふ御諚があつたので實に驚いた夫で御發軔匆匆乃木の宅へ行つたが其時はもう大將の死體は全然取片づけられてあつた寺内伯と宮内大臣に宛てた遺書は急使に持たせて送つたらしい夫れから血塗れになつた大禮服の懷囊の中に七八本の遺書があつて其の中には私に宛てたもの

もあつた（別項参照）夫れで大將と夫人との自殺の時間問題であるが遺書から推定するに大將が自殺する前に夫人に向つて俺が自殺するから一家の後事は頼むと云つたものらしく夫人も一時は諫めたらうが牢固とした大將の決心を翻す事が出来ないで夫れでは後の事は一切承知しましたから安心して御自殺なさいと云つて立派に大將の最期を見届けた上で寧ろ自分も死なうと決心をして大將に殉じたものに相違無い、そして二人の自殺振の立派な事は今の世では乃木夫妻でなければあれ位の自殺は出来ぬであらふ實に惜むべき偉人であると云ひ終つて追想の念禁じ難きやうであつた。

三七 農夫も親しむ（さあヤレ〜）

馬上劔を揮つて三軍を叱咤すれば如何なる鬼神惡魔も降伏すべき
 猛將軍が一度び劔を捨て家庭の人となるや忽ち一個の村翁と化して
 少年婦女子も馴るに至るは如何に其の徳の高きかを知るべきである。

此の高徳の大將は自己の開懇地たる下野西那須野原の小作人等と共に毎年の舊正月に元日の佳例を祝ふが爲に那須野に赴き小作人等一同と車座になりて

『サア目出度ひお正月だ、ヤレ〜。』

と屠蘇を酌み、濁酒を飲み。

總て百姓一同と同じ膳にて、自ら徳利を取つて皆々に酌を爲し與ふるが樂みであつた。

されば小作人等は何れも。

『平民最員の大將様。』

と敬慕する事夥しく大將が日露の役に旅順攻圍軍に將として隊地に入るや出征中は是れ等の農民何れも皆陰膳を供へて大將の武連長久と敵城陥落の早からん事を祈り相競ふて

『水垢離を取るやら、お百度を踏むやら。』

あらゆる赤誠を盡して只管に其の成功を祈つて居つたさうである

が此の一事を聞ひても如何に大將が萬人に敬慕せられて居るかゞわかる。

又た同じ下野の下都賀郡野木村に乃木神社と云ふがある古河驛より二十丁許りの地にて住民は皆な質朴勤儉の美風を備へて居る。

野木と乃木、其音相通ずるのみならず、日清戦争の前に乃木大將の參詣された事のあるので村民は之を結縁となし且つは大將の武動と人格を慕ふて祭典毎に大將へ參列あるやうにと案内状を送つて來る。

ダが大將の野木神社に參詣する時には一度も村民に前以て知らせて置いたことがない、何日も突如けに來ては突如に歸らるゝが例で

あつた故に神職の如きも大將の參拜を知ることなく、唯だ神饌料の包みに乃木と記されし包みのあるを見て、扱てはと喫驚することが度々であつたさうな。

何事にも優しい將軍は此の優しい中にも又た頗る嚴格な人であると云ふ事は凡てに於て之れを知る事が出来るが此に其一例は過る明治三十九年の六月であつた將軍は夫人と共に伊勢の山田に到りホテルに休憩し大禮服を着して、兩宮に參拜をした時のことである。

一旦齋戒沐浴して口を漱ぎ手を清めた上に參拜を終るまでは神を敬するの心よりして他人と言葉を交すことは斷じてされぬのである。

然るに將軍に付き添て來た神官等は斯る美しき將軍の心を悟らぬが故に參拜の途中にある將軍に對して、皇學館へ立寄りあるやうにと再三懇請したが將軍は神に參詣せぬ中は漱ぎたる口を俗人輩に開かぬと云ふ敬神の心であるから。

神官の言葉を五月蠅と云はぬばかりに一睨して遂に一言も發しなかつた。

聽て參拜を終へ大禮服を脱ぎて後ち神官の容を容れ皇學館と高等小學校に立ち寄りて一場の講話をされた。

斯くて伊勢路を出發する、時山田停車場に土産物等の店を出し居る某と云ふものが、伊藤公爵や東郷大將等の揮毫ある書畫帖を差

出し、大將を相可驛まで見送つて揮毫を懇願した。

すると大將は、軍人の表忠碑の外は一切筆を執らずと謝絶されたが某の切なる願を夫人が見兼て口添されたので止むなく大將は筆執りて、する／＼と一首の狂歌を書きつけられた。

參宮のかへりにかみを汚しては

つみをのがれぬ耻のかきすて

三八 紀念の名馬(乃木號)

名將と名馬の佳話は古來我が武士道の歴史に於て屢々花を咲かせて居るが、ここに乃木將軍が遺愛の名馬が三頭あるが其の中の一頭

『壽號』は人も知る如く將軍と最も因縁深き名馬である這は旅順陥落の節敵の要塞司令長官ステツセル將軍が特に乃木將軍に贈りし名馬にして乃木將軍は之れを唯一の愛馬とし凱旋と同時に連れ歸りしが將軍は斯ばかりの逸馬を單に乗馬とするのみにてはステツセル將軍の厚意に乖れり若かず畜産家に與へ大いに『壽號』の血統を蕃殖せしめなば幾分か畜産界に貢献するならんと故軍馬補充部長陸軍中將大藏平藏男に謀りたるに大藏男は伯耆の豪家馬匹の改良に熱心なる佐伯友文氏を將軍に紹介せしかば將軍は大に悦び直に佐伯氏に『壽號』を贈り佐伯氏は同馬を伯耆赤碕に連れ歸りて種馬となしたる結果『壽號』と體形並に生色姿勢を同ふせる仔馬を獲て『乃木號』と命名

し明治四十五年の春に遙々と東上して將軍の乗用にと贈つたものであるが。

爾來將軍の愛を蒙ること數月ならぬに此の乃木號は哀れや主人の將軍を失ふの悲運に遭ふてしまつた。

然るに此の馬は未だ四歳の牡馬にて殊に旅順の陥落に深き因縁を有する名馬であるから斯くと聞き給へる。

『伏見大將宮殿下には。』

大に御同情の御思召を以て、此の馬を召し給ひ末永く御乗用遊ばす旨、馬場別當に仰せ付けになつた。

そこで馬場別當は直ちに將軍の親族たる玉木氏と協議の結果『乃

木號』を伏見宮殿下に献上することとなつたので名馬は宮邸の厩に繋かれたが將軍地下に之を聞いたならば嘸や宮殿下の知遇に感泣することであらふ。

三九 大君の御側へ（殉國至誠の靈）

忠烈軍人の龜鑑と仰がれ古武士の典型と稱されたる乃木將軍、貞烈日本婦人の模範と謳はれたる夫人静子、噫此の二個の柩は國民が哀悼聲裡に送られて徐かに青山齋場に送られたるは實に大正元年九月十八日の午後三時にてありき。

あはれ大將夫妻が最期の地たる赤坂乃木坂上の邸門が深き憂ひに

鎖されたる幾夜幾日門前常に人影を絶つことなく、此の殉國至誠の靈を慰むべく上下坐合掌するもの號泣するものさへ多かりしが愈々夫妻の柩が住み馴れし邸宅を離れて、先帝明治天皇の御後を追ひ奉るべき寂しき首途の日となれば。

曉かけて定め難かりし秋の空も自と晴れて秋晴一碧風も爽かに庭樹の青きを吹くは將軍夫妻が願の適へるを欣ぶもの、如く梢頭蒼りに綿々たる悲風を耳にす。

見よや疎髯弊服の將軍が日毎に鐵蹄憂々と踏み轟かせし新坂の通りに名殘惜しげに落ち行く天つ日の光りを受くる中を黙々と頂垂れつゝ徐かに歩む黒き一團は正に將軍の衣鉢を傳ふべき責めある學習

院の生徒である續いて進むは花環眞榊の幾十對是等は英國親王コンノート殿下以下各國大使館の寄贈に係る殊に佛大使の贈れる榊は全長二丈に餘りたり小早川毛利兩家を始め徳川公親族等よりの榊に次いで 聖上御下賜の眞榊各宮殿下元老大臣等の贈花榊等三百對是等を捧持するものは孰れも白丁の人にてあらで皆カーキ色の軍服着たる在郷軍人の人々なり紅白十二旒の旗は垂れて靡かず悲しげに只微動するのみ次で八名の勳章捧持の將校進む 各左右に二名宛の學習院生徒を従へた就中英武官の緋衣金帽は勝れて高く美しきに優しき幼童の附添へる見るものをして更に哀愁を増さしめたり列の左右に設けたる會葬者控所の邸々は金色燦爛たる陸海軍將校勅任

官以上の人々の出入激しく入るものは襟を正して低語互に將軍生前の風丰を偲び出るものは皆泣然として重き臉の露を拂ふ兩側に長く蝟集せる群集も葬列の靜かに居並べるを見て神清み骨冷えてまだ柩の形も見えぬ中よりハヤ幾人となき土に額を上げて得ぬ人々多かつた既にして一齊の喇叭は低く長く鳴り渡りて悲しき出棺用意を傳へた、乃木邸前に設けてある天幕の前には緋衣に白毛を立てた帽子を被れる英國武官、銀色燦爛たる獨逸の武官、青服青毛を飾れる奥國の武官等二十餘名目も映ゆる、とり／＼の色彩を列べて待つて居る待つもの堵列するもの見るもの皆黙々として言葉なき時邸内より微かに笙簞築の音洩れ來れば將軍夫妻の靈柩は恨み多き自及の室を

出で、玄關前に横附けにされたる砲車と馬車とに移されんとす玄關に佇立せる石黒男は感極つて倒れんとし僅に柱に倚りて支へぬ寺内大將は犇と手と手を握り合せて熱りたる頬に止度も無き涙の顔を得上げず川村大將は擧手の禮せる手を戦はせ遂に兩手もて顔を掩ひ幾度となく涙を押拭ひては又擧手の禮を行ひ居たり居列べる人々皆俛れ泣いて堅く堅く皆口を結ぶ植ゑ込みの後ろに見送れる婦人連女中等は人の後ろに隠れつゝ聲を放ちて泣き叫べり門内の桐花は風なきに音して散つて無言の敷石を叩くも哀みを催ふす種なりき。

やがて黒布に蔽はれたる砲車は先づ敷石を軋りて門外に出でたり『軍事參議官陸軍大將從二位勳一等功一級伯爵乃木希典之柩』と記せ

る雪白の銘旗風に垂れ續いて進む黒き馬車には『陸軍大將伯爵乃木
希典妻静子之柩』と書かれたる銘旗を列べ進みぬ。

曾て愛子、兩典の銘旗を連ねし此の石門今亦た斯くして哀れ深く
も二旒の旗を送り出せるぞ亦た悲し。

見送れる親族は一齊に最後の告別を涙に表はし軍人は最敬禮の姿
正しく佇立石の如く堅く動かす金覆輪の鞍に黒紗を蔽はれたる亡き
將軍の愛馬三頭一聲高く秋天に嘶きて漫ろ拜觀者の胸を扶りぬ列は
徐徐と搖ぎ始め柩砲車柩馬車は軋音を秘て永遠に乃木邸を辭し去り
たり斯て忠臣烈婦の骸は永へに青山原頭松陵一杯の土に埋めら
るゝのである。

青山齋場には此の忠烈なる偉人の柩を迎へるために來りて集る文
武の顯官さては嘗て大將夫妻が鋤鋤を取りたる那須の農民等涙を
んで控へぬ、墓地には旅順戦死者の遺族、廢兵院の廢兵皆な闇然た
る時、嘗て伊藤公を載せたる砲車に今は將軍の柩を載せて葬列は肅
々として齋場に達しぬ迎ふる者皆仰ぎ見るなく碧瑠璃の色を湛へし
秋天も俄かに暗雲去來して天も亦此偉人の最後を弔ふもの如し卷
櫻の齋主副齋主の白衣の祭服にて來るを見れば肅然襟を正さしめ勳
章捧持者の捧げたる勳一等瑞寶章功一級金鷄勳章其他英獨佛等の勳
章燦然四邊に輝やき偉勳赫々千古無比の大將の俤を又た偲ばしめ
た。

斯る間に羅物の紗にて蔽はれたる大將夫妻の寢棺は砲車馬車より下されて徐々として式場に昇き入れられ三發の弔砲殷々として轟き渡りぬ。

應て齋主が悲痛の聲に哀調を帶て祭詞を讀み上げしが其の最後に皇御國の國の礎吾が朝廷の太宮柱とも思ひ奉りし將軍及び其夫人君を失ひし事を惜み悲しみ奉ると共に夫婦此の如く相ひ併せて御尸を捨て遠く遙けき後の世かけて盡きす朽せぬ深き誠め高き教を遣し給ひし事を畏み辱なみ奉りて拜み祭る事を聞召せ云々と讀み了るに至つて聞くもの皆な嗚咽に沈み中には聲を放つて泣くものもありたりき斯て式は終れり惜むべき將軍夫妻の骸は、旅順に

名譽の花と散りたる愛兒の墓に並びて永劫の眠に就きぬ噫々。

四〇 將軍と石黒男爵(健在で居てくれ)

石黒男爵は悵然として云はるゝやう私と將軍との關係を演ぶれば明治五年頃今の山縣元帥が陸軍長官の職にある頃なりき當時陸軍官房には今日の小澤男、貴族院議員秋月新太郎、乃木將軍等ありしが將軍は吳服橋外に下宿し居りて或時病を得たる事あり私は見舞の爲め將軍を其下宿に訪ひ談話を交へしに、將軍の先考乃木十郎氏は兵學家にして武家古實の師範をなし私の父と十郎氏とは交際の深かりし事と知り其れ以テ兩人の交情は益々深さを加へ其上私は元龜天

正頃の古武士の風を愛し將軍亦武士氣質の人なるより話しも自然合口になりて恰も兄弟の如くになりたり。

又乃木夫人は女大學一點張の人にして常に木綿の小紋々附を着し質素儉約を旨とし此れも私の家内と同主義なるより愈懇親を加へぬされば將軍は私に勝典、保典の二兒には折々訓誡を與へて呉れとの頼みあり。

又忬の嫁は是非君が世話して呉れとの話にて私も私の忬に嫁を迎へる時は是非共將軍に媒妁を頼む筈なりしに將軍の二兒は國家の爲め忠烈なる戦死を遂げて此世にあらずなりたり後私は忬に嫁を迎へる際二度まで將軍を訪ねて媒妁の事を申入れんとしたるも愛兒二人

が戦死せる事を思ひ出しては頼むにも頼まれず密に暗涙を吞んで。

更に後藤男に媒妁の勞を頼みたり其後私は時々將軍の子息の墓參をなす事ありしが將軍夫妻は非常に之を喜びて私を徳としたり士卒の苦みを願つ將軍が麻布聯隊長として現在の赤坂新坂の邸宅にある時私は屢々同邸を訪問せし事ある然るに將軍は夏と雖も夜間まで白き軍服を解く事なかりき因て私は一日『軍服の儘では暑くはないか。』

と質問せしに將軍は折しも聯隊にて吹き鳴らす喇叭の音を聞き。

彼の喇叭手は決して浴衣懸けでは喇叭を吹いて居ない。

と答へたり此の一言の中には將軍の眞面目が躍如として活動してゐる

と思ひ心服を禁ずるを得ざりき將軍は漢學の外和歌にも堪能なり明治三十七年に將軍は休職となりて那須に引退し夫妻にて農業に従事したる事あり其年の三月十四日將軍夫妻にて餅を搗き那須の百姓に托して私の家に其餅を贈り來りたる其時の手紙に「三月八日感あり」と題して

埋木の花咲く身にはあらねども

高麗唐士の春を待たまし

との和歌を寄せたれば私は歌の心得なきも

埋木に咲くは櫻の花ならで

高麗唐士の雪にぞありける

と返歌をなしたるに將軍は更に郵便にて

雪ふれば枯木も花はさくものを

埋木のみぞあはれなりける

との一首を寄せ私も返歌をなしたれど今は失念した。

又久能歩兵第十九旅團長は乃木將軍を追懐して語つて曰く「予が歩兵少尉に任官せる時の第一聯隊長は大將であつた。一日大將邸を訪ふとその居室は四壁を新聞紙で貼り一點の裝飾なく殺風景極まる者で其時私かに將軍の高潔に感服した所用を帯びたる身の間もなく辭せんとした時

將軍は今赤飯を馳走するからと引留められたが強て辭せんとする

や衝と將軍は立つて床の間のビール瓶を携へ來つて自ら口を開きま
あ一杯と薦められた其刹那予はあゝ此の將軍ならば生命を捧げても
好いと深く感銘した。

其から中尉時代近衛聯隊に勤務中將軍は第一旅團長であつた、一
日將軍を訪問して小官は語學其他の學科を更に研究して大に國家に
盡したいと希望を述べたるに其は好いと大に賛成されたが數年後予
の希望は其素志を捨つるに至つたが數年後將軍は尙ほ予の事を忘れ
ず。

予の親友に向つて久能は近來如何か、語學は上達したかと質ねて
下さつたと聞き感泣した、其から四十三年夏予が中央幼年學校長と

して生徒を引率し鎌倉へ遠足に行くと瓢然其處へ將軍が來られて一
包の新聞包を渡され之は煙花で爆發の具合は生徒の志氣を鼓舞する
だらうと言はれた。

而して閣下は御一緒に辨當を食りませんかと聞けば否や乃公は持
つて來たと皮包を開かれて共に握飯を喫せられた將軍昨年は第十六
師團と第四師團との對抗演習統監の資格にて京阪に來られたがそれ
が京都方面に將軍が見えた最後であつた其時

久能健在で居てくれ……。

と一語殘されたが其が永別の一語にならうとは……。
と涙ながらの物語りであつた。

四一 質素の將軍(テント張の食堂)

二〇三攻撃中、第一師團司令部の高崎山觀測所には、兒玉滿州軍總參謀長が福島國司の兩參謀を従へて觀戰して居る、乃木軍司令官は要塞攻撃顧問の鮫島中將、軍の參謀長伊地知少將を従へて來り會し。

お粗末な掩蓋を有する、一坪半程の狭い土窟は當時の最高司令部であつたが戰況は一進一退、更に抄々しくない上味方の死傷は續出して。

骨山血河を現する慘狀、各將軍は何れも頭が熱して居る、僕の如

き師團長の許諾を得て、指定の場所から觀戰して居る者共を幕僚と間違へて、怒鳴り付けた人もあつた、第一師團の星野參謀長は各將軍の晚餐に、出來得る丈の馳走をして、葡萄酒でもあげたら好からうと、管理部に交渉した、管理部では三四里の地に、通譯官を走らせ、少量の蠣と、鶏肉鶏卵を買來らしめ、洋食まがひの三品ばかりを調進し。

第一師團參謀部の前面、テント張の食堂に、各將軍を招待した、兒玉總參謀長初め追々山を下りて來て、食卓に就かれれが、最後に入つて來た乃木將軍は。

食卓を見廻はして、隈部高級副官に向ひ、何故こんな美食を進め

るか。

軍中には似合はしからの贅澤な献立ちや、元來日本人には一汁一菜といふのがある自分は深く之に感じて、是非廣く及ぼしたいと思つて居る、二十七八年の役、第二師團長として出征中、高級副官が過分の馳走をして私に進めた、一二度斥けてもまだ持つて來るから結局にはたゞき付けてやつた事がある。

元來人に馳走する奴は、自分が美食をしたい氣の事ぢやと、さんぐの不機嫌であつた、以來第一師團司令部では、乃木式と唱へて一汁一菜の外餘計な事をしなくなつた。

將軍が第二師團長で、日清戦役の畢り、仙臺に凱旋した時、時の

縣知事勝間田稔氏は出征將校の歡迎宴遊會を開く事になり。

乃木將軍も一旦は出席を快諾されたが、當日新瀉藝妓の粹を選び酒間に侍せしめるとの噂を聞いて、將軍は色を作し、折角の御招待部下將校を牽連れて、當日出席の筈であつたが。

賤業婦を招かれるとあつては、遺憾ながら拙者を始め、部下一人も此の招宴には應じられぬと斷つた、知事は頗る困却したが、遂に女氣を一人も用ひず、縣會議員や郡書記で、赤前垂の代りを勤め、僅に園遊會を行つたと、當時將軍に従つて、凱旋した一將校は語つて居た。

旅順開城後 第三軍は間もなく北進する事となり、諸隊は續々行

軍を開始した、第三軍司令部は遼陽に止まり、第一師團司令部も、諸隊整理の爲め。

一時同所に停止した、時は滿洲互寒の最も厳しい二月上旬、黒溝臺の戦鬪は頗る激甚を極めて居る、露探の疑ひある支那人は、絶えず出沒するといふ際、松村第一師團長は、病氣の爲め薨去した。秘かに遺骸の處分を了ると間もなく後任として、飯田中將が到着した、今日は軍司令官に逢つても、唯着の挨拶をして、直立歸るといつたので、第一師團幕僚は、會食の用意を整へ、今かくと待受けたが。

師團長は歸つて來ぬ、二三時間も經つた頃、軍司令部から使をも

つて、飯田師團長の外套を取りに寄り、更に二時間ばかりを經て、漸と師團長は歸つて見えた、聞けば到着の挨拶をして、引取る積であつた處、乃木將軍は戦争の經過から、將來の作戰計畫を諄々として説示し。

遂に五時間に及んだが、比較的廣い室に、螢のやうな火を入れた手あぶりが一個きり。師團長は寒氣に堪かね、とう／＼外套を取りにやつた、兼ねて乃木式を知つては居たがまさか、彼程とは思はなんだと、飯田師團長もひどく驚いて、幕僚に話して居られたそうな。

乃木の一生を見れば光榮ある歴史の中亦一種云ふべからざる悲痛

の色調を帯べるを感ず彼は先づ萩の亂に際し伯父玉木文之進の養子となれる實弟が前原一誠に與せる爲め伯父は自ら責を負ふて自及し茲に癒し難き心の傷を得たり。

西南の役には小倉聯隊を率ゐて熊本入城の命を受け先發隊は幸に入城し得たるも麾下の本隊は薩軍の沮む處となりて其目的を遂ぐる能はざりき之亦乃木に取りて恨事たりしや論なし臺灣總督となりし時も折柄老母を喪ひて忠誠至孝の彼で中心の苦痛は轉た同情に堪へざるものありたり。

日露戰役に於ける旅順攻撃は其功を完うして威名を世界に轟かしたるも之が爲め多數の兵士を戰歿せしめ殊に愛兒二人を失ひたる彼

は更に心の傷を深からしめたり。

元來乃木は正直嚴格にして微塵も私を容れざりし爲往々俗人よりは偏狹なりなど評判さるゝに至れるではは亡父より享たる性質にして彼の晩年は彌々亡父に酷似し來れりとは知人間にて取沙汰し居りたる處なり。

斯る性質に加えて前に云へる諸種の事件に遭遇したれば益々古武士の性格を形造り遂に今回の如き殉死の覺悟を爲すにも至れるならん去ながら若し今回の事を以て其原因を病に歸する如き人あらば是れ見るもの、僻目なり。

既に死を以て君に殉する以上乃木の心中區々世評を顧みざるべき

は勿論なれども之を病の故なりとして輕々に評し去る如きは斷じて國士に對する禮に非ず假令殉死と云ふことが賞すべき行爲ならずとするも。

今回乃木の一死は輕薄無氣力なる今の世に一服の亢奮劑を投せるものなるは疑ふべからず我等は世人が克く死者の至忠至誠の心を解し我陸軍の誇りたる乃木の殉死をして無意味に終らしむるなからんことを望むとは三浦梧樓子の談である。

四二 噫々乃木夫人

全く夢のやうである。乃木大將夫人が亡くなられたとはどうして

も思はれないあの血色のいゝ凜々しい顔容、その質素なる縮りある風姿、透りのいゝ涼しい語音はまざくと夢、現、裡に來往する：
：静子夫人が初めて東京に出られたのは當の十五の春であつた乃木將軍に嫁がれた年は何時であつたか先づ第一に旅順攻圍軍の犠牲となつて乃父の馬前に、潔く戦死した長男の勝典中尉が今日存命せらるれば三十四になる。

それから繰つて見れば花のやうな處女静子が乃木將軍即ちその頃の乃木少佐夫人となられたのは明治八九年の頃でもあらう？乃木夫人となつた。

静子は年少して十年の變亂には幼兒を抱いて西南の空を憂ふる身

となつた、唯だそれ丈けでさへ若い夫人には重任である上に、その頃には未だ年若い姑があつた。

乃木將軍の生母と云ふ方は非常に精力の強い萬事に拔目なき女性であつた、その上に朝、晝、夕の三回には必ず食卓に少量でも酒がなければ満足されない人であつた月々に五升に下らぬ酒を召されたが……そのほろ酔機嫌の姑に仕へるのは容易なことではなかつたケレド幼い時から聰明であり。

その頃の女としては珍らしい教育のあつた静子夫人のことであつたから、憚りに忍び堪へに堪へて、嚴格なる夫に仕へては貞節を盡し始には出来る丈け……自我を没して仕へた、而してその間には

勝典中尉と共に旅順の花と稱へられた保典少尉が生れた。

さなきだに事多い静子夫人は母として、亦その年若い血と力とを分けねばならなかつた。世事には些しの願盼もせず、何等野心のない乃木將軍とその愛兒の教養と云ふことに就ては……子供の嚴父として人は一倍に意を用ひられた！未だいたい盛りの勝典氏と保典氏とを或日突然捕へて庭前の樹下に起立を命じ短銃を差向けて爆然發射すると流石に保典氏は少しも騒がなかつた！この時より將軍が保典氏を愛撫するの念は愈々深くなつた、ソシテ。

『この子丈は乃公の志を繼げるだらう』
と樂しまれたのであつたが……義を重ずる保典氏は旅順攻圍軍中に

令兄勝典中尉が戦死せられたと聞いた「兄戦死するの後、どうして吾のみ生きられやう」と勇戦してあの壯烈なる最期を遂げ乃父より。

『豚兒出来した！』

との稱辭る得たのであつた。かう云ふやうに愛兒の教育に熱心なる乃木將軍は兩令息に須臾も苟安を與へない或時は三宅坂より赤坂新坂町の自邸までの距離を測量せしめ、突然日頃通り行く道路のメートルを問ふなど到らぬ限もない位である、それ故に静子夫人が令息に對する一舉一動には非常に精密なる注意を以て將軍は觀察してをる！そして秋毫の手落も見逃さうともしない、乃木將軍の愛兒に向

はれる心は特別で、子供のことは一毫と雖も傭人や下女下男に任せではならぬ、必ずその母が自ら手を下してせねばならぬと云ふのである、夫故に静子夫人の多忙と努力とは到底並大抵の婦人には出来ない位、子供の衣服の仕立から、縫張り、洗濯さては綻びの繕ひ迄も自らせねばならぬ。

此多忙と努力とは勝典、保典兩令息の世を終られる迄續けられたのであつた、乃木大將の嚴格に比して劣らぬ愼ましい静子夫人であつたが愛兒には自由を與へた、乃木家を訪うてその隣室に兩令息の柔道の稽古のもの音を聴くことは珍らしいことでなく。

時としては間の唐紙を推し外して兩令息が折重なつて客間に轉げ

込むこともあつたけれど將軍も夫人も決して叱責せられるやうなことはなく。

微笑を湛へてそれを傍觀されてをつた。併し禮儀、作法と云ふことに至つては何處までも厳しく訓へられたので。

勝典さんも保典さんも行儀のよいことでは大人も及ばぬ位でしたと今でも親戚の人々は云合したやうに語つてをる、子供は親を寫すの鏡で、この令息の母であつた靜子夫人も亦稀に見るの慎しみし婦人で、年少の頃と伯爵夫人としての昨日までと少しも變つた處はなかつた。

キチンと端坐さやたその容姿が浮んで來るやうに考へられる靜子

夫人と將軍との間には故き勝典、保典兩令息の外に三人許り令嬢があつたけれど一人を除いて外は夭折され。

一人の令嬢のみは十三四歳迄は存命せられたが遂に是も亦黄泉の客となつた。

それやこれやで心を痛むる間に將軍は獨逸留學となつて留守を任されて氣六ヶ敷い姑に仕へ男爵夫人となつては多忙は愈多忙になり。

努力は一層努力を必要とすることになつたその中に將軍は臺灣總督を拜して任地に就かれると生母も共にと遂に同行したが間もなく。

海外千里の客地に病み附かれたその時！静子夫人が愛兒を内地に残して單身將軍の任地に馳せて老病篤き姑を看護してその最後を心安くせしめた苦心は知るも知らぬも稱へぬものはないのである、かうして氣六ヶ敷姑に仕へ嚴格なる夫に侍した静子夫人は猶も多忙と努力とを持續して兩令息も成人したと思ふたのも束の間、兩人ともに旅順の朝風に露と消えて終つた。

大將夫人と稱へられ、伯爵夫人と讚美せられる静子夫人もその過去三十餘年の苦心の跡とその悲惨なる愛兒の最期を思うては、如何に涙が多かつたらうけれど、静子夫人は唯一度も女々しい涙を見せなかつた。

そして内には將軍に仕へて貞節を盡し、外には優しい、頼母しい御方として慕はれた、併し多忙と努力とは遂にその身邊を去らなかつた。

その氣骨を休めるの日と云ふは殆んどなかつた！静子夫人の四十年の生涯は眞に奮闘の歴史で、更に貞操のレコードであつた！あの將軍、この夫人、そしてあの令息、あゝ將軍も將軍、夫人も夫人令息も令息、永く／＼私共の記憶から去る時はないであらう。

千古の
大偉人 乃木大將 終

大正十三年二月十五日印刷
大正十三年二月十八日發行

定價金五拾錢

著者 櫻木寒山

東京市淺草區南元町廿八番地

發行者 鈴木與八

東京市神田區佐久間町四丁目六番地

印刷者 瀧川長之助

東京市神田區佐久間町四丁目六番地

印刷所 瀧川長正堂

不許複製

乃木大將

發行所

振替東京一四七〇六番
電話淺草二八二一

東京市淺草區南元町廿八番地

盛陽堂

291
606

終



東京
盛陽堂刊